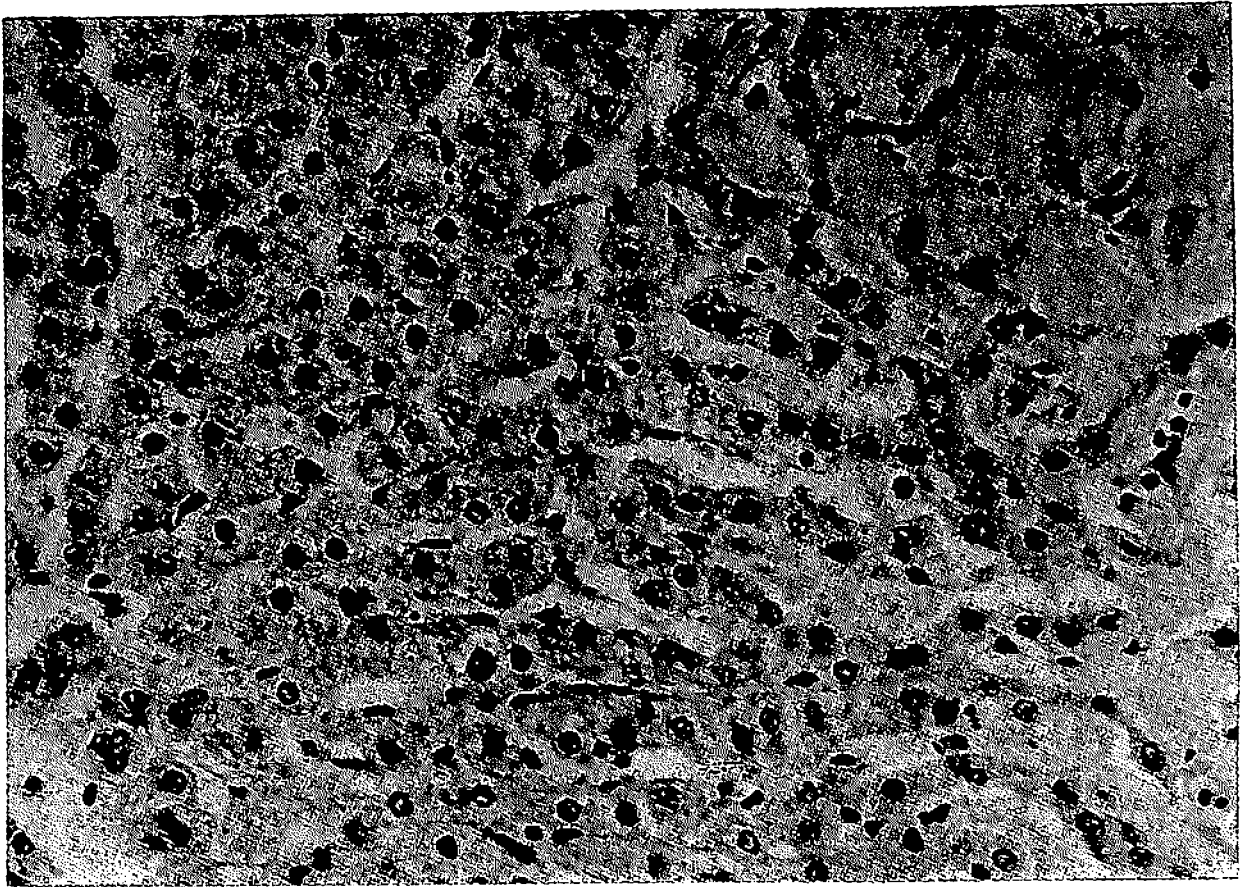


牛肝臓のアミロイド沈着

日本大学農獣医学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.243



材料は昭和50年5月7日、東京都芝浦と場で採取し、10%中性緩衝ホルマリン液にて固定し、パラフィン包埋とした。生前の諸事項は不明である。

肉眼的所見：肝臓と肝門リンパ節以外の臓器の所見は不明である。肝門リンパ節は腫脹し、断面は淡赤褐色で充出血状を呈し液分に富んでいる。肝についてみると、左葉は全体に萎縮し辺縁は尖鋭となっている。右葉は肥大し辺縁は鈍円となっている。右葉内臓面下部に出血、壊死巣があり、この病巣内には肝蛭の寄生が認められる。尾状突起は萎縮を呈している。小葉構造は全般的に明瞭である。胆路系は全域において中等度以上に肥厚し、左肝管粘膜は顆粒状となり、黄色粘稠な滲出液を含む。左葉の中間領域の上下の胆管枝は特に肥厚隆起し石灰沈着を起し、粘液性の滲出液を充満している。胆路内には肝蛭は認められない。

組織学的所見：肝蛭の実質内寄生による変化は肝組織の崩壊・壊死で、出血と好酸球の著明な浸潤が伴っている。そして更に遠隔の間質内にも好酸球の著明な浸潤が認められる。このような肝蛭寄生による変化以外に肝の

全域において、主として肝小葉内の周辺帯～中間帯に硝子様物質が著明に沈着している。この硝子様物質はH-E染色において毛細血管の周囲、所謂デッセの腔に沈着している。したがって類洞は狭窄し、血液のウツ滞を伴っている。また肝細胞は圧迫消失を来し(写真・H-E染色・中拡大)、格子線維(鍍銀染色)の崩壊も伴っている。この硝子様物質はメチル・バイオレット、クレシール・エヒト・バイオレット、トルイジン・ブルウ等で、一般的に弱いメタクロマジーを呈し、ワン・ギーン染色でカーキ色に、アザン染色で淡紫色～淡青色に、PAS染色で弱陽性に、またコンゴー・レッドで淡赤色に染色される。またコンゴー・レッド染色蛍光法では橙色～橙黄色に、チオフラビンT染色蛍光法では白色蛍光を發し、偏光顕微鏡では偏光を呈した。以上の染色性よりアミロイド沈着と診断した。その他肝門リンパ節にも軽度のアミロイド沈着が認められた。本症例のアミロイド沈着は肝蛭寄生とは関係なく起こったものと考え。おそらく慢性乳房炎か、化膿性炎を患っておったものと考え。